四民須知

梅毒遁れ

中村重治

特4

059743−000−8

特47−486

梅毒遁れ

中村　重治／著

M23

CBH−0423

七A720

四民須知 梅毒道

愛生醫院
副院長 中村重治著述

愛生醫院藏

完

特47
486
No.4287/23

四民須知

梅毒遁を

本書の主意

著者は愛生醫院に在て多年梅毒病者を診察治療するに付け其病者の始め毒を受けたる時の様子及ひ其後の養生の仕方などを親く探り見るに若し其病者にして梅毒の何物たるを知りたらんにはヨモ斯る淺はかなる様となるなからんものをと轉た不愍に堪ぬを屢々ありたり、それゴ就て是非とも梅毒を遁るゝ方法として世人ゴ知らしめんとの思望

と起し此節遂に該小册子なる梅毒遁れを著はすことにありたり、斯る著者の精神なるを以て縱令五人にせよ、三人にせよ此小册子の爲に將に落さんとする鼻を拾ひ將に半産せんとする赤兒と全産せしむる者あれば本書に對して大に著者の滿足する處なり

梅毒ハ無比の惡病なり

凡そ世上に多くの病ありて吾々の生靈を害しつゝある中に就き梅毒ハ社界に害毒を流したるを最も甚しき病の一つなり否な他に比類なき最惡の病なり、何を

以て最惡の病と云ふ、人先つ何れの時代より梅毒の世に存在するかを思ふへし夫の西洋紀元の始まるキリストの時代よりも夫の我國紀元の起る神武天皇の時代よりも夫の佛教の開祖たる釋迦の時代よりも夫の儒教の大祖たる孔子の時代よりも尚ほ遙に昔の時に於てモセスと云ふ人の書たる世界中にて最も古き本と見るへし其第三卷利未記 Leviticus 第十五章を見るへし之を見は既に其時代よりして梅毒の人身を害したるを悟るに足らん若し尚ほ其以前に於て世に書物のありたらんには人類創造の時代より梅毒の存する

を証するやも亦計るへからざるなり斯の如く梅毒は最も古き病なるを以て最早自然に消滅してヨイ加減の者なれども中々以て消滅の摸様なきのみならず如何に梅毒醫者が治療の明法を發明したれはとて甲人の毒を亡せば乙人に到て再ひ茲に旗を揚げる有様にて治療の明法も萬軍に對する一劍たるのみ、又如何に警察的の梅毒醫者が陰門の檢査と密に すれバとて全國の梅毒を少からしむる克わざるのみならず現に檢査しつゝある處の娼妓よりして受毒するもの亦少しとせず故に

警察的の豫防法も亦大湖を漁するの一網たるのみ彼の虎列刺病の如きは人の最も恐るゝ病なりと雖も是れ僅々七八十年前印度に於て掀めて世に生れ梅毒に比ずれは未た孫よも當らぬ程の幼稚者なり而して只夏期に際し人家輻輳の地と撰で散在的に流行し清潔なる村落等に於ては最早人を害するの氣力なし又縱令人家稠密の都會ありとも其土地清潔なるか或い上水下水の改良あれは之よ避易する位の氣弱なる病なるを以て將來衛生の工事一歩を進むるときは之と世に斷滅すると難からざるへし

又世人の最も厭忌する彼の癩病の如き一旦之に罹るときは親友の交際も斷へ結婚の快樂も求め難く憂々鬱々只死を俟つの外なき有樣となり梅毒に比すれば尙ほ一層の不愍と極むると雖も幸にして梅毒に比すれば稀有の病なり、歐洲にては一時此病の盛に流行したるにも係らず公衆の衛生法殊に癩病者を癩病なき人より離隔する法を施したるの結果として目今に至ては全く其跡を絶ちたるの有樣なり、之を以て見るときは將來此病を世上に斷滅すると亦强ち望なきにあらず

又肺勞の如きは之に罹る者甚だ多く從て人の生命を奪ふこと亦他病の比すへきにあらず目下之と梅毒に比して害毒の一層廣大なるは誰人も知る處なり然れども斯の如く害毒の甚しきを來せし所以のものは一つは從前歐洲にても我國にても本病の慢性傳染病たることを悟らざるの結果に坐せずんばあらず、故に自今無學の俗人に至る迄肺病の冥々中に健康人に傳染することを心得天下盡く是が豫防に注目するに至れは亦年を重ねて自然に本病の減少するは必定なり

右の如く虎列刺も之を鑒殺するの望あり癩病も之を

斷滅したるの經驗あり肺病も亦自然減少するの理あ
りて存するなり、獨り梅毒は至ては然らず、數千年前も
セスの時代よりして人々既に業は梅毒の傳染するを
を心得從て爾來是が豫防法及ひ撲滅法に種々意匠を
凝ト したるにも係ず今日に至る迄毫も其勢力を挫
くことなきは前にも述たるが如し、而して時期と場處と
時代とを撰ハす苟も人間の棲息する處必す此毒あり
て害毒を逞ふせざるはなし、必す鼻と落す者あらさる
はなし、必す頭顱の藥鑵となる者あらさるはなし必す
聲の鼻音となる者あらさるはなし又必す姙婦の半産

するものあらさるはなし又必す爲に命を落す者あら
さるはなし、既は斯の如く大古より世に存して斯の如
く頑姦執惡猖獗なり無比最惡の病と云はすして何と
か曰ハん

斯の如く梅毒の無比最惡の疾患なる所以の原因ハ主
として其病の傳染ハ交合なる秘密所作に成ると以て
一々其秘密は立入りて之が防禦は干渉し難きに在る
なり即ち公許娼妓の外猥りに人々の陰具を撿し難く
又其交合を制止し難きを以てなり既に陰具を撿し難
く交合を制止し難き以上ハ公衆的衛生法の無効なる

と勿論なり故に却て個人的衛生法即ち人々梅毒の遁れ方を知り之を遵守して自己を防禦すると以て甚た重要なりとす

梅毒の見分け

梅毒い吾人の身體に於て通例如何なる形を以て發生するかを知らざるが爲に實ま馬鹿氣たる損亡を蒙る者世ま少しとせす今余(著者)が實驗中より其一例を示さんま某人或る日疑ハしき交合を遂げたる後受毒を恐れ自ら陰部を撿し見るま果して小腫の生するを發

見したれは周章して某醫師に掛け附け診察を乞ひさるに其醫師の曰く是れ梅毒の兆あり謹で藥用せされい將來大害を釀さんと茲に於て愈々自ら梅毒たるを疑はす肉を斷ち酒を止め謹慎以て藥用すること半年に及へり然れとも其陰部の小腫物は依然として更ま治癒の模樣なきを以て或は藥劑の不適當ならんを疑ひ遂に余か治療を乞ふに至ると云へり余之を診ずるに其小腫物なるものて陰莖龜頭冠部にある處の粟粒よりも尚ほ小さき程の粒々したる者まて是は乳嘴体とて無病の人にある者なり決して梅毒の兆まあらす而

して其他全身を撿するに少しも梅毒の兆あらりし故
は余い云へり是決して梅毒に非ず健康体なり前醫の
之を梅毒と明言したるは果して誤診したるや將た貴
君の自ト梅毒と信するを奇貨として射利を企てたる
や其邊ハ余に於て斷定し難しと雖も兎も角も無病壯
健にして半年餘の治療を受けたるい貴君に於て馬鹿
氣たる損失を蒙りたるものはして必竟するは貴君が
梅毒の如何なる形を以て發生するかを知ト ざるもの
其損失の原因と云はざるを得ず自後肉を食ふも良し
酒を嗜むも差支なし只猥りは藥用する勿れと云ひ放

ちけれは或は驚き或は惑ふの樣子なりしも遂は謝儀
して立去たり、尚ほ一例を擧くれは某少年偶ま友人は
誘はれて花街に遊ひ爾後梅毒を恐れて陰部を撿し見
るは龜頭の周圍に於ける溝の内は白膿の沈着せるを
見る是れ正しく梅毒の兆ならん若し將來鼻を落し頭
髮を失ふに至れは何の面目あつて父母兄弟友人に對
顏するを得ん若かず寸時も早く藥用せんにと意を
決して賣藥の服用を始めたり爾後日月を重ぬるは從
ひ始め白色なりしものの次第に黑色を帶び腫物の形狀
とをすは至る故に增々恐れて藥用を怠らす既に一年

餘に及ぶも治痊の模様なし由て診を乞ふに至ると之を診するに其腫物なるものハセブム Sebum 即ち俗ヨカスと云ふ者に垢及ひ塵埃等混合し半ば乾燥して固着したる者なり、故に是れ決して腫物に非らす清潔に洗いさるの結果なりと謂ひつゝ此凝着物を剝ぎ取り見しに其跡ヨて健全の皮膚面顯されたり是に於て少年一驚と喫してハヽ一

以上の如きハ病を恐るゝを度に過き否な梅毒の如何なる形を以て生ずるやを知らず只猥りヨ之を恐れたるの結果ヨして損ハ即ち損なりと雖も其反對ヨ立つ

處の恐るへきを恐れすして來す處の損害に比すれは未だ同日の話ヨ非トさるなり今試に其一例を擧けん

に或る田舍の一男子久く僂麻質斯に罹り藥用せしか其後偶々鼻内に一腫物と生し膿汁と漏すに至る某醫梅毒なトんと云ひ尚ほ他醫も之を梅毒と診斷せり依て暫く藥用と試みるも急に治癒の模樣なしとて來て診と乞ふ余之を診するヨ全く梅毒症なり依て受毒の覺あるや否やと問ふに更になしと答ふ然れとも尚ほ委しく之と質し見たるに十年前陰莖に指頭大の硬結を生したるをあれとも腐蝕して膿汁を漏すをなく又

便毒を生せす疼痛とても更ゝ之なきを以て別ゝ手當もなさすして放抛あたりと云へり故に余は告て曰く貴君が恐るゝ處の陰莖腐りて便毒に膿を釀す者の如きは多くは眞の梅毒に非らさると以て却て深く恐るに足らざれども今貴君の云ふ處の疼痛もなく便毒も生せざる其硬結こそ實に恐るへき害物にして正しく梅毒の始めなり後悔するも最早及び難あと雖も貴君が鼻の半を消失したるの原因は恐るへきと恐れざりし結果と云わざると得す若し始め硬結を生したるの際其梅毒さるとを悟り藥用を怠らさりしならは今日

貴君が鼻ハ必す全きを得たるへしと述へ終て投藥し久しからすして全治するを得たりと雖も既に欠けたる鼻の過半れ(造鼻術を施の外)再び補ふ克ハすして最と醜き形と殘したり此醜き形と殘したるハ甚だ不愍なり然れとも同人の妻の樣子を質したるに尚ほ一層の慘狀を極むる者あり何そや懷姙するを四回に及ふも盡く數ケ月にして墮胎し一兒として生存する者なきのみならす其妻自身肝臟の腫物に罹り遂に死せり と此肝臟の腫物とハ恐く梅毒に依て生したる者なり斯の如く良人の鼻を削り妻兒の生命を奪ふ者其原因

する處は梅毒の如何なる形を以て生するかを知らす從て恐るへきと恐れざりしにあるのみ、斯の如き實例一々枚擧に遑あらす要するに人々梅毒い如何なる有樣を以て發症するかを心得ざれば爲す圖らさる不幸ゑ陷るとあるを知るへし因て左に發生の概略を示して以て梅毒を見分けるの票準たらしめん

男女交合に依て受くる處の傳染病と花柳病と云ふ之に左の三種あり

(第一)淋病此病は受毒後數日の後尿道に於て痛を起し

次て膿出つるの病にして其痛は日を經るに從ひ次第ゑ減少し遂に全く無痛となるも膿は容易に止まさるを常とす縱令ひ一時止みたる後も酒を飲み肉類と多食するが如き不養生をなすときは再ひ膿汁出て易きものなり尿道の深部及ひ膀胱内ゑ淋病の波及するときは排尿の際絞る樣の痛ありて尿液心地克く出てす半ば殘る樣の氣味を覺へ時としては尿の出終りゑ血液を絞り出すとあり又睪丸に淋病の波及するときは睪丸腫れて痛甚しく歩行も出來ざるゑ至り熱ありて食餌さへも進まぬ樣ゑ成り數日の間は甚た苦痛を覺

ふるを常とす其他肛門に淋病の及ぼすことあり陰門又は子宮に及ぼすことあり或は膝の關節に及ぼして僂麻質斯様の痛み腫れ等を起すことあり若し又淋病の膿汁眼に觸るゝときは両眼を滅す程の眼病と起すことあり斯の如く諸般の症狀を發すと雖も梅毒に於ける如く

全身を害することなし

(第二)軟性下疳、此病は毒を受けたる日より二三日位を過ぎたる後陰部に於て始め小なる赤き腫物生をし其腫物間もなく破れ次第に腐る病にして其腐りの甚しき者は男子なれば陰茎の半ば或は全きを失ふ

程に至ることあり(腐る有様蠟燭の火に流るゝが如し故に俗に蠟燭下疳と稱するとあり)而して多くは便毒を生し其便毒疼痛ありて膿を持つに至ること多し斯の如く陰茎の大半腐蝕し去り便毒に膿を釀す等劇き容体を發すれとも是亦

全身を害することなし

(第三)梅毒、此病は毒を受けたる日より廿日も三十日も過ぎたる後始めて受毒部の皮下に硬結を生し其部の皮面は糜爛して稀汁を漏し(之を硬性下疳と云ふてもよし)容易に治せず治したる後も硬結は殘り急に消散せざるを常とす、便毒を生すれとも膿を持つ程に至ると殆ど之

なく又痛もなきと常とす而して暫くの間い右れ容体のみにて別に何たる事もなく只少く身体ゑ違和を覺ふる位なるも硬結の發生より數週の後ゑ至て徐々ゑ或は楊梅瘡或い咽頭糜爛或い頭髮脫落等諸般の容体と發し來る者とす若し始め受毒の節其部に著き疵傷あるときい其疵傷は軟性下疳の如き有樣となし三四週を過きたる後に其疵傷の底及ひ周圍に於て硬結と生し始めて梅毒(硬性下疳)の本相を呈するとあり又時としては只小なる硬結のみにて皮面少しも糜爛せずして終るとあり又稀にい軟性下疳と硬性下疳と合併

たて其合併したる容体を呈するとあり斯の如く種々の變生ありと難も眞の梅毒たる以上は常に**硬結**を生するとを記臆せざるへからす故ゑ此硬結の有無に注目するときは素人も略ほ梅毒初發症の見分けを成克ふものとす偖て其硬結の硬度い殆んど皮下に鼈甲板の一片を差入れたるものを觸るが如く其大さは小豆大若くは豌豆大乃至は五厘銅貨大乃至て陰莖包皮全面に廣延し硬結と以て龜頭と圍擁するか如きあり

但し稀にい著明の硬結を生せすして終り、後に全身の梅毒を生するとあり殊に婦人の膣内に受毒したるときの如きい患者更

に腫物の生せしを悟らさると屢々なり

全身の梅毒症狀は甚復雜にして之を記臆せんとするも容易のことあらす故に全く醫師の診斷に任せざるへからす

梅毒の毒性

梅毒ハ觸接傳染病にして其毒を含む膿汁等に直接に觸るゝときに限りて傳染するものなり決して空氣の媒介等にてハ傳染することなし又其毒非常に稀釋せらるゝときに於ても傳染力を失ふ者とす我國の洗湯ハ多人混入するの風習なるを以て梅毒の膿汁流れつゝある者健康人と共に入湯することあれども未だ曾て入湯に依て梅毒を受けたる者あるを見聞したることなし是れ二三滴の膿汁幾斗の湯水に混して稀釋せられ傳染力を失ふ實例の一つなり又縱令ひ梅毒の膿汁に直接に觸るゝとも其觸れたる部分の皮膚健全にして一點の微傷もなきときは其毒體内に入るの道なくして傳染を免るゝものなり偖て眞の毒質ハ如何なる者なるかと云へハ是れはシヒリスバチルレン梅毒桿菌と云ふもよしと申して五百倍の顯微鏡にて微かに見克ふ位の小なる虫の如き者なり此虫の如き毒質を含みたる者ハ傳染の力を有し之を含まさる者は傳染の力なし故に何の中に之を含むかを記臆するときは豫防に甚便利な

れは左ゟ大畧と陳述せん

(イ)前述の硬性下疳より漏す膿汁中(ロ)血液中(ハ)梅毒の腫物より滲出する液汁中(ニ)梅毒の腫物腐爛して漏す膿汁中(ホ)精液中等ゟ之を含み含まざるもあれども大小便、汗、唾液等ゟは之を含まざるを常とす但し咽頭或い口内に糜爛若くい潰瘍あればソレより漏す處の液汁唾液に混し其唾液有毒となる又體内ゟ梅毒あるも他ゟ原因に依て腫物を生しソレより漏す處の液汁中ゟは傳染力を有せざるものとす例之い梅毒者に疥癬を生ゟ水疱膿疱と形成するも疥癬い梅毒と別病なるを以て其疱内の液汁中には毒を含むとなく又は梅毒者火傷して大ゟる

水疱と形成するも其水疱中の水液い無毒なるか如ゟ、痘疱の如きも全く之と同く有梅の小兒ゟ種痘して生する所の痘疱中より痘漿を取り之を他の健康兒ゟ傳種するも決して梅毒を傳染するとなし但し痘漿を取るの際誤て血液の微量と共に採取して之を他兒に種接すれは梅毒を傳染するものと心得へし乳汁の如きも毒質を含まざると常とす然れども其乳汁の性質不良とゟるを以て小兒に與へざると良とす

交合並に交合外に因ての梅毒傳染

今衆人に向て梅毒は何れの道よりして傳染するかと

問へは異口同音交合に因ると答ふるならん再ひ問を重て交合の外に傳染の憂なきやと云へば有りと云ふ者あり無しと云ふ者もあらん此なをと云ふ者は殊更に眼目を銳くして本書を讀まさる可らす

偖て梅毒ハ交合の際如何なる狀態を以て傳染するかと云ふに陰具互ひの摩擦に依て上皮の幾分剝脫し或ハ破裂して以て所謂疵傷を生しソレより毒質の竄入するを因るなり而して其疵傷ハ必ずしも大なるを要せす縱令ひ肉眼を以て認め克はざる程の微小なる疵までも猶ほ毒を受くるを難からさるなり

斯の如く上皮を損處ありて其部に梅毒の毒質觸接し以て傳染を來す性質の者なるを以て强ち陰具に限らす他處に於ても同樣乃關係あれは亦齊く傳染する者たるを知るへし陰具の外を最も傳染を受け易き部分ハ口唇肛門乳嘴眼瞼等なり此等の部分ハ上皮非薄にして疵傷を生し易きか故に傳染し易き者とす故に或ハ接吻に依り或ハ煙管に依り或ハ茶碗其他の飲食器具に依て口唇又ハ口內に傳染を受け或ハ遺傳梅毒ある小兒に授乳し以て乳嘴に傳染を受け或ハ尻拭紙を依て肛門に傳染を受け或ハ手巾に依て眼瞼に傳染を

受ける者等ハ屢々見聞する處なり其他上皮の菲薄ならさる部分に傳染を受くるの例も亦少しとせす例之ハ接吻に依て頰部顧部に傳染を受け又は醫師看病人等梅毒の膿汁を取扱ひ自己の手より傳染を受くるが如し、總て皮膚より損處ありて其部に梅毒の膿汁附着するときは塲處と人とを撰ばす必す傳染を受けざるはなし只此傳染を免るゝ者は自身既より梅毒を有するものと獸類とのみあり又自身梅毒に罹りたるとあるも既に其梅毒の根治したる者は亦同く傳染を免るゝ克はざるなり、斯の如く陰部の外より傳染を受けて發する處

の症狀は前に述へたる陰部の發症と大差なし由て記さず

交合時の豫防心得

交合を試んとするに臨み對者若し面色蒼黃、頭髮稀粗、呼氣に惡臭を帶ひ赤褐色の小腫物諸處より群生し或は大腫物ありて皮肉腐るか如き容子を發見せは誰人も梅毒と恐れて交合を見合すへし、然れとも斯の如き著明の容体一つも之なしとて決して梅毒なきと保し難し陰部に著然たる梅毒を有するも其毒の未だ全身より

廻らさるの間は別に何たる容体も發せざるを常とす、されば貞操上確信を置き難き以上は交合に臨んで陰部の指撿を行ふと甚た緊要とす（視撿は容易に行ひ難き故）若し之に依て怪しき手當りを感ずるときは交合を見合するに非らざれば避梅嚢を用ひさるべからすルーデサックと稱して市舗に販賣する護謨製の嚢は賣價二三錢の者あり

既に交合に際して注意すへきは亂暴ならさるを要す時間の長からさるを要す、此時間の長きと亂暴なるとは疵傷を生し易きを以て從て毒を受け易し故に大酒

の後は決して交合を成すべからす大酒後の交合は毒を受くる者最も多しとす又一夜の中に二回の交合を成すときは是亦甚危險なり、接吻も可成忌むべし

既に交合を終りしなれは寸刻も猶豫せす直に陰具を充分に洗はさるべからす若し疵傷を發見せは殊更に其部を丁寧に洗ふを要す少しの出血又は痛み位に避易するの場合に非らす出血は毒の幾分を洗ひ流して却て豫防の助をなすとあり

硝酸銀其他の腐蝕藥を以て燒くとい自身に行いんよりも醫師に依頼するを良とす、包莖者い最も毒を受け易きを以て一日も早く其治療を受け龜頭の自由に露出する樣至し置くを良とす、平素陰莖包皮の龜頭を被包する習慣ある者い包皮の下面幾分か濕氣を帶ひて上皮脆くな

るを以て平常龜頭の露出する習慣ある者に比すれは傳染を受け易しとす

淋病の豫防法ハ右梅毒の豫防法と殆んと同一轍あり

と雖も右の外交合後直ち排尿すると甚た肝要なり是れ一旦尿道内ち竄入したる淋毒質を排尿に依て洗ひ流す爲なり

尿道下裂口とて尿道口龜頭の前端に開口せすして下面に開口する者少からす此者ハ最も淋毒を受け易し婦人月徑時、産後陰門より惡露の漏る時又ハ白帶下を患へ居る者と交合するときハ男子に於て淋疾に類せる容体と發するとあり

交合外傳染の豫防

前ち交合の外ち傳染するとあるを述べたるを以て別に其豫防法を述べすとも讀者自ら悟るならん要するち梅毒の液汁着きたる者ハ總て清潔ち洗ひ落し又梅毒病者を看護する時なとハ自身の手足等の疵あるやを否やと檢し若し小疵を發見するときハ其部ハ膏藥又ハ黴附を塗り毒の觸接を防くへし又梅毒の疑ある小兒に授乳するの際若し乳嘴に疵傷を生するときハ其疵の癒る迄ハ他側の健康乳嘴のみを授くへし且つ乳嘴を永く小兒の口内ち含ましめず飲み終れば直ちに離して洗滌せさるべからず

豫防附言

梅毒を免んと欲して前以て、藥用し置くも決して効かきものなり、往時西洋にても大言者流は諸般の藥劑を以て梅毒を豫防する効あるものと云ひ囃し之が販賣を企てたれども一つとして其効を奏するものなし、水銀劑は梅毒の治藥中有力の者なると以て豫め之を服し置かは梅毒を免るならんと誤想したるものあれども決して豫防乃効あるものゝ非ト す彼の職業に依て不斷水銀を取扱ふ者も(例之は鏡匣鍍金師の如きもの)まて水銀中毒を起す程も体内ゝ水銀分を含む者)猶梅

毒傳染を免るゝ克はさるなり

養生の心得

凡そ病を癒すには養生を以て最も大切のことゝす若し其養生にして病に適當をるときい藥石を用ひすして治癒すると甚多し是に反して其養生にして病に不適當ならんか如何なる良藥も其効を奏する克いざるなり故に梅毒者も淋病者も養生法を以て第一着の治療法と心得服藥よりも尚ほ一層重んぜざるべからざるあり且つ又梅毒淋病等の養生は特ゝ忍耐を要するな

り若し梅毒病者某の容体を以て醫療を受け其容体の治痊すると共に病毒の根治せるものと誤想し酒と飲み臓肉を食せは忽ち病勢舊トに復し折角先きの治療と受けたるもの全く水泡に歸するのみならす或は却て病勢一層増惡するものあり、淋毒も之と同く藥用に依て膿止み痛おきに至ると以て根治せるものと誤想し酒と飲み肉を食ひ攝生を怠るときい再ひ膿と漏すに至り愈々慢性とぃなる故に梅毒淋病共に表面上全治せるか如きも決して養生を忽にすべからす必す良醫に就て根治せるや否やと診斷を受け醫師の根治を明

言せさる限りは謹慎攝養と怠るべからす故に左に養生法の大要を陳述せん

飲食物

養生法中最も肝要なるは飲食物にして一般に淡泊の者を撰み臓味の者を避けさるべからす只病者衰弱するか体質惡しきときは醫療の法とおて體力の復する迄專ら滋養物を食せおむるとある故斯る場合には臓味の者を食して可なるや否や醫師に謀るべし

肉類中新鮮の魚肉は一般に獸肉に比すれば害の少な

き者あり、食して可なる者は比目魚、鯛、鰈、鱈、鶏魚、華臍魚、膾殘魚、烏賊、石班魚、鰌、前魚、鰺、龍蝦、かさご等なり、食して惡しき者は鱒、鰻、鰯、青魚、鮪、鰶、鯡、鮭、むつ、ほうぼう、海鰻、皮鯨等なり

貝類は多くは食ふて可なり然れとも皆消化し難きと以て胃の虚弱なる者には素より不可なり只牡蠣に限り消化ふ易きを以て胃の強壯ならざる者よも用ゆるとあり

獸肉中にて食ふて可なる者は牛肉、馬肉、羊肉なり豚肉の如きは害あるを以て食すべからす又野兎、鹿ハ多く

ハ害あきものとす

鳥類も多くは害あふ他し雌鶏の脂肪に富める者、鵝等は食せさるを良とす

鶏卵ハ食して可あり牛乳も亦飲て可なり然れとも場合に依てハ之を忌むとなしとせす、驢乳、山羊乳ハ牛乳に比すれは却て良しとす、總て乳汁ハ之を攪拌し或ハ冷所に放置して上面ヨ浮む處の酪分と除き又煑沸せしむるとき上面ヨ浮む者を除き去るときは猶更害の少きものなり

穀物ハ多くハ害あし但し糯米、燕麥ハ食せさるを良と

す莢穀類の中にては大豆黒豆の類と忌むを良とす但し豆腐は百分中八九十分は水分なるを以て少々は食して害なきものとす粉質類例之は青芋、馬鈴薯、薯芋、慈姑、百合、栗、八頭芋、等皆食して可なり、蔬菜類も多くは害なし只午旁)うど、筍、小松菜、唐菜等は大量に食せざると良とす、海藻類にては裙帶菜、昆布、羊栖菜、青海苔、乾海苔、等皆食して可なり然れとも此等は皆不消化物なるを以て胃の虚弱なるものには素より良からす、果實類も多くは害なし味噌醤油の類亦然り只酒は飽まで之を禁せさるべかトす

鑛泉療法

梅毒の頑固症に溫泉療法著しき効を奏すると間まあり然れども只溫泉療法のみと以て梅毒を治せんとするも容易に根治するものに非らさると以て溫泉療法を行ふ傍らに必す藥用を怠るべからす通例溫泉の入浴、海水浴、冷水浴等は梅毒藥の効能を補佐するものとす、今梅毒者に良しき鑛泉を擧くれは概略左の如し

上野國　草津鑛泉、谷川村鑛泉、澤渡村鑛泉、湯島鑛泉

下野國　日光鑛泉、湯本鑛泉、塩原鑛泉
甲斐國　大宮村鑛泉、岩下鑛泉、下部鑛泉、釜口鑛泉
相摸國　蘆湯鑛泉、藥師鑛泉
紀伊國　勝浦鑛泉
伊豆國　大湯鑛泉、芳那鑛泉
肥前國　小濱鑛泉、古湯鑛泉、温泉ケ嶽鑛泉、大地獄鑛泉
肥後國　山鹿鑛泉、雛來(日奈久)鑛泉、湯谷鑛泉、垂玉鑛泉

以上の鑛泉皆梅毒に効ありと雖も病症に依て多少の適否一應醫師に相談したる後に入湯するを良とす而して入湯數ハ一日三回以下を以て足れりとす殊に虚弱の者老人等ハ一日一回にて充分なり時刻ハ朝

夕を良とす

淋病の養生法

飲食物中酒類は第一の害物なり故に洋酒も日本酒も全く之を禁せざるべからす、彼の麥酒の如きは亞爾個保兒分少きを以て多量に用ひざれば害なかゝんと思ひ好酒家は之を淋病の藥用中に頓着なく嗜飲する者少かゝす然れとも其亞爾個保兒分の少き割合にハ害毒甚だ強きものなり

肉類ハ梅毒にハ害するを少く牛鷄羊馬等の肉を許す

塲合少かゝずと雖も淋病には一切食すべかゝす只魚肉殊に鯛比目魚鰈の類は少々づゝ食おて可あり
牛乳は淋病に少しも害おし塲合に依ては却て之を飲むと必要とするとあり
茶菓子の類多くは害なお
塩醤油の類亦通常の煮物に用ゆる位は害おしとす然れとも淋病急性にして排尿時は疼痛を覺へ排尿の度數一日は十回も二十回も通ふか如き容体あれゞ可成鹽氣を減せざるべかゝす
劇しき運動例之は乗馬舞蹈競走或は遠足等も可成禁

するを要す、劇き容体には通常の歩行も害あり故に勉めて褥に就き身体を安静にせざるへかゝす交合も亦害あり縱令交合せすとも淫情を起すときは害あるを以て成べく此情の起らさる工夫をおすべし
淋病の膿の附きたる紙の類は必す便所は棄つべし決して屑籠等は入れ置く可らす又其膿の附きたる褌衣服等は必す清潔は洗滌せざるべからす手も亦此膿汁を扱ふ毎は洗ふことを忘るべかゝす、手、手巾等は此膿の附着せる者を洗ひ落すことを忘れ知らす々々其手其手巾を以て眼を擦り爲に眼内は淋病傳染して劇き

眼病を起し遂に両眼壞れて盲目となることあれば大
に愼まざるべからす

養生雜門

始め陰部に發症したる下疳は日々二三回宛洗滌して
充分清潔に保たざるべからず殊に軟性下疳に在て然
りとす若し之を洗滌せずして只膏藥を附ケ換ゆる位
に致し置くときは其下疳部より漏す處の膿汁膏藥の
下に鬱積して次第に下疳增大して甚しきは陰莖の過
半を腐蝕し盡す程に至ることあり是れ其下疳より漏

す處の膿汁は腐蝕力を有するを以てなり此狀態は軟
性下疳に限らず全身梅毒に依て生ずる潰瘍にも亦見
る處にして例えば表面に結痂を生じ其下に膿汁蓄積
するときは潰瘍忽ちに增大することあり故に斯る場
合には油類を貼して結痂を落し膿汁を漏すを必要と
す

便毒を生じたるときは始めは之を散らすことを勉む
るを良とす人々或は坂を舉ぢ或は遠足を試み或は酒
を飲み膩肉を食ひ强て便毒に膿を生せしめ之を切開
して毒を除かんことを欲すれども實際に於ては之を

散らすも膿を持たせて切開するも將來に取て利害の差違あきものなり故に之を散らす時ハ苦痛に逢ハさる丈けの利益ありとす然れとも既に幾分か膿の生したる後ハ散らさんとするも容易ニ散るものに非らさるを以て却て巴布を附ける等にて速かに膿の充分出來る工夫をあすべし

咽頭に糜爛を生するときは速ニ喫煙を禁斷せざれは甚たしき害をあすものあり

梅毒者ハ平素身体を可成溫暖ニ保つを良とす故ニ衣服ハ常人よりも一枚位ハ多きを良とす又平素可成身

体を清潔にするを要す洗湯ハ少しも害なきを以て毎日入湯するを良しとす

淋病の劇しき者にハ腰湯をなせハ甚た心地克きものなり

梅毒は小兒に遺傳する性質あるを以て未婚者は病毒の根治迄結婚を見合せ既婚者は必す懷姙を避くへし懷姙を避くる輕便の法は男子にルーデサックを用ゆるに在り若し誤て懷姙せハ墜胎するか然らずんは小兒病身にして國家の厄介物となるのみ可愼可愼

明治廿三年六月十一日印刷
明治廿三年六月十三日出版

版權登錄

正價金拾八錢

發行者兼著作者　東京麹町區上二番町二十二番地　士族　中村重治

印刷者　東京々橋區弓町十三番地　松本義保

發兌書肆　東京日本橋區馬喰町二丁目　島村利助

セX 720

愛生醫院副院長中村重治纂譯

●梅毒治療新論

全壹冊　郵稅共定價金六十五錢

本書ハ梅毒治療ヲ以テ有名ナル獨乙國プロフェッソルドクトル、ハー、ツァイスル氏及ヒ同國維納大學梅毒ノ教授ドクトル、エムツァイスル氏ノ梅毒論ニ基キ同國爾他諸大家最新ノ著書ヲ參照譯出セル者ニテ梅毒軟性下疳及ヒ淋疾並ニ此等ニ關係セル諸般ノ疾病ニ就キ一々區分ヲ立テ最モ樞要ナル治療ノ新法ヲ詳細論述シ醫家ノ坐右一日モ欠ク〻ヘカラサル寶典ナリ

明治廿一年六月出版

發兌書肆　東京日本橋區馬喰町二丁目　嶋利